

へば、女をどろきて、人もなしと思ひつるに、物じきさまをみえぬる事と思ひて、物もいはずなりぬ。

〔大和物語上〕先帝醍醐の御とき、卯月のついたちの日、うぐひすのなかぬをよませ給ふける。

公忠

ばるはたゞきのふばかりをうぐひすのかぎれるごともながぬけふかな、となんよみたりける。  
〔大鏡八〕この天曆上の村の御時に、清凉殿の御前の梅の木の枯たりしかば、もとめさせ給ひしに、なにのぬしのくらびとにしていますかりしときうけ給はりて、わかきものどもはえ見しらし、きんぢもとめよとの給しかば、ひと京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこゝなる家に、色こくさきたる木のやうだいうつくしきが侍りしをほりとりしかば、家あるじの木にこれゆひつけ候てもてまいれといはせたまひしかば、あるやうはこそはとて、もてまいりて候しを、なにぞとて御らんじければ、女の手にてかきて侍りける。

勅なればいともかしこしうぐひすのやどはととはゞいかゝこたへむとありけるに、あやしくおぼしめされて、なにも、家ぞとたづねさせ給ければ、つらゆきのぬしのみむすめのすむ所なりけり、遺恨のわざをもしたりけるかなとて、あまへおはしましける。○又見拾遺和歌集九

〔十訓抄九〕七條の南室町の東一町は、祭主三位輔親が家なり、丹後の天橋立をまねびて、池の中島を遙にさし出して、小松を長くうへなどしたり、寢殿の南の庇をば、月の光いれんとてさ、ざりけり、春の始軒近き梅がえに、鶯の定りて、巳時計來て鳴けるを、有がたく思ひて、それを愛する外の事なかりけり、時の歌よみ共にかゝる事こそ侍れと告めぐらして、あすの辰の刻計に渡りてきかせ給へとふれまはして、伊勢武者の直宿して有けるにかゝる事あるぞ、人々わたりて聞んするに、穴かしこ鶯打などしてやるなと云ければ、此男なじかはつかはし候はんと云、輔親とく